
結婚式前夜

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚式前夜

【ZPDF】

Z0011D

【作者名】

霧野ミノト

【あらすじ】

惰性で生きてきた。惰性で全てを終わらせた。だから、このまま、ずっとそうだとthoughtた。それでいいthoughtていた。だけど……

僕は、ビール袋から、ビールを取り出すと、プルタブをあけ、一口含む。

特有の苦味が口に広がる。

そして、それと同時にアルコールが体中にまわり、体温が少し上昇する。

幾分温かくなつてきたとは言え、まだまだ夜は肌寒い。だから、これぐらいがちょうどいい。

僕は、もう一口口に含むと、缶を置き、空を見上げる。都会の光に邪魔されながらも、星は鈍く輝いている。だけど、それでも、僕には十分だつた。

いや、むしろ、それがぴたりだと思った。

田舎の綺麗な、それこそ澄み切つた星空は、僕には不釣合いで。汚れきつたこの身をした僕には。

僕は、ここまで来るまでに、ずいぶん汚い事をした。友を切り捨て、媚を売り、そして・・・あらゆるものを使して、ここまで来た。別に、今の僕はえらくもなんともない。

それこそ、たんなるしがない会社員でしかない。だけど・・・

本当なら、僕はその会社員にすらなれなかつただろう。僕は、いつも手抜きで生きてきた。

何かをまじめに成し遂げたことなかつた。

大学も、偽者の自分を担任の前で演じて見せて、それこそまじめな生徒のふりをして、推薦枠を手にした。

大学に行ってからも、それは変わらない。

適当に、大学に行って、気分が乗らないときは休んで、その後、適当に知り合いからノートを写させてもらつていた。

バイトもしなかった。

比較的裕福な家だから、その必要がなかつたのもある。だけど、時間があると言つのに僕はしなかつた。

ただただ、惰性で行き続けた。

そして、就職もそう。

教授のコネで入れてもらつた。

媚を売つて、手に入れたものだつた。

僕個人として、努力した事はなかつた。

そう、一度として。

そして、今もそう。

なにも、変わらない。

僕は、惰性で行き続け、運だけで、こゝして生きている。

明日、僕は結婚する。

この結婚もまた、惰性。

僕の妻となる人。

その人が敷いたレールの上を歩くだけ。

あらゆる準備は彼女がした。

告白の言葉も、プロポーズの言葉も。

何もかもが彼女が準備した。

すべてを彼女が準備したのだ。

僕は何もしてない。

努力なんて言葉、僕には必要ないから。

「ここにいたんだ」

不意に声がした。

もちろん、誰かはわかる。

僕の妻となる人だ。

「ああ。独身最後の日だからな。一人で宴会でもしようと思つてさ

その彼女に対して、僕は、戯言で返す。

いつもいつも、そつだつた。

僕は、彼女と真正面から向き合つことはなかつた。

結婚にそんなもの、必要ないから。

結婚と恋愛は別物。

同じように考えてはいけない。

お互い、踏み込んでいいものがある。

特に、夫婦となるなら。

「そう。私も一緒にいいかしら?」

彼女もそれをわかっているのだろう。

あえて何も言わず、そういうと僕の隣に腰掛ける。

それに対して、なんら文句言うことなくうなづくだけ。

身体の距離は近いけど、心は果てしなく遠い。

仮面夫婦。

きっと僕たちの関係を表すならば、そつなるだろう。

「うーん。外で飲むビールも格別ねえ」

彼女は、隣に座り、僕が買い込んだビールのひとつを開けて飲むと、気持ちよさそうにそういうた。

その姿は、僕がよく見知った彼女の姿だった。

僕の前で、彼女は常に奔放に振舞つて見せる。

他の人間の前では、それこそ淑女然としているくせに。

まあ、そうせざるを得ない状況だからとも言えないでもないが。

彼女は奔放に振舞うことを許されていなかつた。

常に、淑女でなくてはならなかつた。

上流階級の人間として。

そう、僕の妻となる人は、いわゆるお嬢様というやつだ。

そして、僕は、その逆でどこにでもいるような一般庶民だった。

比較的裕福だとは言つたが、それはあくまでも庶民レベルの話でだ。

彼女たちのような上流階級の人間とは、雲泥の差がある。

だから、もちろん、問題も浮き上がつた。

いくら、綺麗事を言つたところで、やはり身分の差がある。

特に向こう側は認めなかつた。

僕と彼女の関係を。

まあ、僕自身も認めたくはなかったが。

もとより、彼女が無理やり、そうしただけで、僕の意思は何一つ含まれていなかつた。

僕自身、何よりも面倒ことは嫌いだから。

惰性で生きてきた。

だから、面倒ことに巻き込まれることに慣れていないし、慣れたくもなかつた。

だというのに、わざわざ、そんな中に飛び込むわけがない。

実際問題、今でも僕は、この結婚がなになつてもかまわない。

彼女がそれを望むのだったら、僕は喜んで、白紙に戻す。

いくら、なんとか彼女が説得したと言つても、順風満帆にいけるとは到底思えない。

確實に、大嵐を常に警戒しないといけなくなるだろう。

ただ、こうして、僕が彼女といるのは、あくまでも、単なる責任でしかない。

僕と彼女は大人だ。

男と女の関係になつた事はいくらでもある。

もちろん、責任と言つたが、子供ができるわけじゃない。

避妊に関しては、しつかりとしておいた。

欲しいわけでもないのに、作るわけにはいかない。

子供だつて、つらいだろう。

本当の意味で、望まれて生まれきてた子供ではないだなんて。だから、そんな事はしたくないから、きつちりとしていた。

僕が言いたい責任はそれではない。

僕は、彼女を抱いた。

それに対する責任だ。

もちろん、抱いたぐらいで責任を感じる必要性はない。

もし、そんなものを考えなければいけないのならば、いつたいどれだけの夫婦ができるのだろう?

それよりも、現代は、性に関するては、非常に問題意識が低い。

だから、小学生で、そういう関係になつてている者だつている。

だといふのに、もし、それを考へると言つなれば、小学生にして結婚を考えると言つてゐるようなものだ。
はつきり言って、むちゅくちゅだ。

そんなふうに、考えさせるほうがおかしい。

だけど、僕自身は、そう考へていた。

はつきり言おう。

僕は、そういう行為に全くと言つていいほど興味がない。
むしろ、嫌悪感を抱いていた。

だから、必然的にそういう行為を、したいとは思わなかつた。
それこそ、子供を作るとき以外には。

だけど、僕は、それを破つてしまつた。

もちろん、僕が望んでしたわけではない。

彼女に押し倒された結果、そうなつたわけだ。

けれど、経緯はどうであれ、僕が彼女を抱いたことには変わりない。

だから、それ相応の責任は取らないといけない。

そして、その結果として、これなのだ。

結婚なのだ。

僕は、彼女が望むように愛する。
別に嫌いではない。

むしろ、好きな部類に入る人だ。
愛する事に支障はない。

いくらでも、愛せる自信はある。

「ねえ？貴方は何を見ているの？」

残っていたビールを一気に飲み干していると、横から彼女が問いかけてきた。

その声は、一人きりの時には珍しく、淑やかなものだつた。
もしかすると、これが彼女の素なのかも知れない。
わけもなく、そう思った。

「何も見てないさ。俺には何も見えない。何も見ないで、見ようと

しないで、逃げてばかりいる」

そして、僕は、彼女の問いに対して答えた。

普段なら、茶化すだろう。

だけど、なぜか、真摯な言葉で返していた。

「そう」

その答えを聞いた、彼女は声を落とす。

その真意はわからない。

ただ、芳しいものではないのは、間違いないだろう。

いつも思うが、彼女は常に僕の様子を見ている。

心配そうに僕の事を見ている。

それこそ、最初に会ったとき、彼女は初対面の僕に対して。

「何をそんなに苦しんでいるんですか？」

そうたずねてきたのだ。

箱入り娘のせいなのか、どうかは知らないが、ぶしつけな問い合わせだった。

僕自身、あきれたものだった。

まあ、何度も話しているうちに、それは消えていったが。

うつとおしくはなったが。

それでも、嫌いにはなれなかつた。

「さあ、そろそろ戻ろうか？ 主役一人がいつまでも、酒盛りして、

当田」「日酔いになつてたら、元も子もないし」

僕は、飲み干した缶をすべて、ビニール袋につっこむと、立ち上がり、彼女に手を差し出す。

「う、うん」

彼女はその手をとり、立ち上がる。

そして、僕たちはそのまま夜道を歩く。

暗い暗い夜道。

途中にあつたゴミ箱に、空き缶を捨てる。

そばには、噴水がある。

いまだ噴出し続ける水は、淡いライトの光を浴びて、きらきらと光

る。

「ねえ。貴方は、いつまで、昔の恋人を思い続けるの？いつまでも、罪を背負い続けるの？」

それに見惚れていると、彼女が僕にまた、問いかけをしてきた。
けれど、内容は先ほど以上に深いものではあつたが。

「貴方の親友に聞いた。貴方つてば、どんなに口をすっぱくしても、茶化してばかりで本当の事を言つてくれないから」

彼女は、そういうと僕の隣まで歩み寄ると、僕と同じように噴水を眺める。

「ねえ、いつまで苦しんでいるつもりなの？いつまで、自分を傷つけるつもりなの？」

そして、そう続けた。

その言葉は、僕の胸に一つ一つ突き刺さつた。
悲しいほど強く突き刺さつた。

そう、僕は、今なお罪を背負い続けていた。
そして、その罪と言うのは・・・・

恋人を見殺しにした事だ。

僕は、一度、自分の恋人を見殺しにした。
心から愛していると言える人だつた。

だけど、僕は、そんな恋人を見殺しにした。

あれは、高校の時だつた。

彼女の母親は、夫、つまり彼女の父親の浮氣で、心がぼろぼろになつていた。

精神が不安定で、ヒステリックを起こしていた。

僕もそれを知つていた。

彼女がおびえていることも。

もちろん、僕も心配で、相談には乗つっていた。

誰よりも愛しい人だから。

だけど、僕の対応は真摯なものではなかつた。
簡単に考えすぎていたのだ。

彼女の母親がどんどん追い込まれて行き、彼女はどんどんおびえていった。

僕に助けを求めて、僕の家に逃げさせてくれと言つた事もあった。だけど、僕は、それを・・・

『『だめだよ。もう、お母さんには、お前しかいないんだから、ここで、お前までいなくなつたら、お母さん本当に一人になつてしまつだろう?』』

断り、挙句の果てに、諭そうとしたのだ。

結局、彼女は、僕の言つた事を聞いて、そのまま家にいた。

そして・・・

その日、彼女の母親に殺された。

もう、彼女の母親は娘の事がわからなくなつていた。

それどころか、彼女の事を、夫の愛人だと勘違いしたのだ。

そして、狂つた彼女の母親は、泣いてとめようとする彼女をめつたざしにした。

僕が、彼女の電話を聞いて、彼女の家に着いたときは、すでに彼女は虫の息だった。

そして、彼女は体中を血だらけにして、恨みがましい目で、僕を見て『うそつき

そう言って、死んだ。

それは、あまりにもグロテスクな世界だった。

子供が目にするには、あまりにも生臭い世界だった。

まだまだ、青臭い子供が見るには、あまりにも残酷だった。

だから僕も発狂した。

狂つたように笑い続け、彼女の母親は殴り倒した。

何もかもが壊れてしまった。

自分のせいで。

自分の浅慮のせいで。

友はみな、僕に同情してくれた。

僕に慰めの言葉ばかりかけてくれた。

誰一人として、僕を悪く言つるのはいなかつた。
誰も僕に罰を与えてくれなかつた。

だから・・・

だから、僕は自分自身で罪を科した。

何も望まないようになつた。

何も望めないようにした。

今の僕は何も望めない。

いまさらだから、はつきり言おう。

僕は、妻となる彼女の事を愛している。

深く深く愛している。

でも、だからこそ、僕は望まない。

望めない。

それが、罰だから。

恋人を守れなかつたおろかな男への罰だから。

「貴方がいまだに昔の恋人の事を引きずつているのは、わかってる。
私はそれを分かつた上で、付き合つていたわけだから。でも、これ
以上は無理。もうこれ以上、貴方がぼろぼろになる姿は見ていたくない
ない。確かに、貴方は罰を受けるべき罪を犯した。だけど、それか
ら、もう何年が立つと思うの？10年よ。10年も経つたというの
よ。もう、これ以上、苦しむ必要はない。貴方は許されていいのよ。
貴方が自分に罰を科したなら、私がその罰を解く。貴方がどれほど
まで、苦しんで、傷ついてきたのかは、知つてているから。だから、
もう、許してあげよう？」

彼女は、そういうと、僕を抱きしめる。

女性にしては、やや高めの身長。

けれど、平均的男性の身長である僕よりかは、小さく、その姿はや
はりどこかこつけいに見える。

だけど、僕には、それがそうとは思えなかつた。
むしろ、包み込まれているように錯覚してしまつた。
いや、それは錯覚なんかではないのだろう。

現実的に、彼女は僕の事を・・・
僕の心を包み込んでくれる。

僕の罪を許すかのよつこ。

そうだ。

何事にも、終わりはくる。

こんなふつに罪を背負い続ける日も終わらなくいやいけないんだ。

僕が犯した罪は、一生消えないだろ。

だけど、それでも、許される時が、来てもいい。

これは、他の誰でもない僕が背負つた罪。

だから、他の誰でもない僕が許さなくてはいけない罪。

これが見殺しにしてしまった彼女が刻み付けたものなら、違ったかもしねない。

だけど、彼女は、何も残さなかつた。

ただ

『うそつき』

その言葉を残しただけ。

自分勝手だけど、もう疲れた。

もう、彼女はどこにもいない。

どんなに背負つたところで、何も変わらない。

ならば、いいだろう。

勝手に許しても。

「そうだね。許してやるか。いつまでも、どこまでも、何も変わらない。なら、やめてしまったほうがいいか。もとより、俺は面倒な事は嫌いだから」

そして、僕は彼女の言葉に答えた。

それを聞いた彼女は抱きしめる力を強くした。

僕は、それを享受する。

なんだか、それがおかしい。

普通なら、男女逆だと思う。

だけど・・・

それも、いいだろう。

彼女は僕の前でだけ奔放に振舞う。

なら、僕だって、彼女の前だけ、甘えてみるのもいいだろう。

それぐらいありだろう。

(後書き)

まあ、落ちが面倒になつて、都合主義になつた奴です
ww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0011d/>

結婚式前夜

2011年1月29日14時44分発行